

3年道德通信 第13号

第13回『闇の中の炎』

コンクールに出す作品のアイデアが浮かばず悩んでいた理沙は、画集にある作品を参考にして、下絵を描きます。その下絵を先生に見せると褒められるのですが、しだいに後ろめたさを感じ……。部活を休んだ日、父に別の作品をまねて書くことの是非をきくと、父は「その子はわかってるんじゃないか。自分がだめと思ったらだめだって。」と言います。理沙は改めて画集を見て、自分はこの炎を描くことはできないと心を決めたのでした。



既存の芸術作品を参考にして自分の作品を描いたことに後ろめたさを感じている生徒の物語を通して、法やきまりを守ろうとする心について考えました。

みんなの意見

「だめだと思ったらだめなんだ。」と思った理沙は何をだめだと思ったのか？

- 自分のアイデアじゃなくて人のアイデアだから。自分が考え出したのではないから。
- まねして描いて、「これでいいんだろうか」と悩んで、絵が進まなくなったこと。

夢中で鉛筆を走らせている理沙は、何を考えているのでしょうか？

- 自分なりの作品を作ってみせる。人の評価よりも自分が納得いく作品を。
- どうしたら自分らしさを表現できるかな。
- 自分らしい絵を描こう。自分が納得できる絵を描こう。
- もう締め切りには間に合わないけど、今出てくるアイデアをとりあえず描きだせるだけ描いてみよう。



法やきまりについて思っていることは何ですか？

- 有名な作品や絵を見て勉強するのは良いけれど、まねをして自分の作品にするのはダメなので、その違いを分かったうえで、作品を作らないといけないと思いました。
- ルールは窮屈にさせるためにあるのではなくて自分らしくできるようにあるのかもしれない。
- はじめは良いと思っていたけれど、父の助言によって、理沙なりの作品を描くと決めたことは大事な判断だと思いました。法やきまりは必要なだとも思いました。
- 私は「心のものさし」をしっかりと使えるようにしたいです。

法やきまりを守る心の源とは、何だろう。

